

総合文化研究所 Workshop Series 第八回

十九世紀ロシア風景画——第一回移動展覧会におけるサヴラソフ《ミヤマガラスの飛来》の評価

報告 井伊裕子

サヴラソフの代表的な風景画《ミヤマガラスの飛来》(一八七一年)を一例として、その分析と批評から《ミヤマガラス》の評価の源泉を探った。

十九世紀半ばに至るまでロシアの風景画は伝統的な西洋風景画の規範に則ったものが主流であり、ローカルなロシアの田園風景が描かれることは少なかつた。しかし一八五〇年代以降から特に若い画家たちを中心にロシア独自の芸術を希求する動きが活発化していき、ロシアの農村風景を描いた作品は数を増やしていく。

この一連の流れの中でサヴラソフはロシアの田園風景を主要なテーマに据え続けた最初期の画家の一人と位置付けられ、「ロシアの風景を描いた画家」として現在まで称揚され続けてきた。特に今回着目した《ミヤマガラスの飛来》は発表された第一回移動展覧会開催当時から現在に至るまで際立って高い評価を得ており、画家の代表作ともなっている。報告では発表当時の批評家の言説を検討し、さらに第一回移動展覧会で出品された他の風景画と比較した。

同時代の言説にはスターソフの展覧会報告の記事とコラムスコイが弟子に宛てた手紙があり、両者共に《ミヤマガラス》を絶賛している点で一致している。特にスターソフは絵画の描

写に紙幅を割いており、絵画的に新規性の高い作品と見なされていたことがうかがえる。

また他の画家の風景画と比較検討すると、横長の画面に空と大地を二分した構図と平穏な農村風景が描かれている作例が大半を占め、海外の風景を描いたものも存在した。移動派はリアリズムと社会批判的なグループと評価されてきたが、ここでは伝統的な風景画の画法を踏襲し、理想化された農民像が再生産されていたことが示されている。

一方《ミヤマガラス》は複雑な空間構成や冬から春へ移り変わるという時間設定の新規性が特徴的である。加えてサヴラソフの弟子の回想録から画家が自国の自然に対する素朴な美的感覚を持っていたことを指摘した。

以上のことから、風景画はイデオロギーの影響を受けることが他のジャンルと比較して少なかった点、さらに《ミヤマガラスの飛来》はロシアの風景を絵画化したものとして評価されてきたが、構図の新規性やモチーフの新鮮さに大きく注目されていたことを明らかにした。

発表日 二〇一九年七月十七日(水)